

所 陵

No. 87

[SENRYO/KANSAI UNIVERSITY MUSEUM REPORT]



加茂遺跡出土弥生土器（台付長頸壺形土器）

● 目 次 ●

小野蘭山旧蔵の琉球勾玉について	徳田 誠志	2
浜降りの儀礼	黒田 一充	6
国府遺跡から出土した「刻痕有鹿角器」について	合田 茂伸	10
関西大学博物館 2023 年度夏季企画展 「浪速の町絵師 菅楯彦が愛した大阪」開催報告	原田 喜子	14

関西大学博物館

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号

Tel. 06-6368-1171 (直通) Fax. 06-6388-9928

<https://www.kansai-u.ac.jp/Museum/>

小野蘭山旧蔵の琉球勾玉について

徳田 誠志

はじめに

筆者は昨年夏、本学博物館山下学芸員、山口講師と共に武田科学振興財団杏雨書屋が所蔵する「小野蘭山愛蔵石類」の調査を実施した。その調査報告は『関西大学大学博物館紀要』に掲載したところであるが¹⁾、先般その調査成果を持参し、改めて杏雨書屋を訪れた。その際、同書屋の瓢野由美子氏より、小野蘭山の所蔵品について『蘭山先生蔵畜品目』という書物が存在することをご教示いただいた。本稿では同書に掲載された琉球勾玉を紹介するとともに、小野蘭山が琉球勾玉を所蔵していたことの意義、あるいは江戸時代における琉球勾玉研究に触れながら、琉球勾玉とは何かを再度考えていきたい。

1. 「小野蘭山愛蔵石類」の琉球勾玉について

それではまず、昨年度調査した「小野蘭山愛蔵石類」に含まれていたの琉球勾玉について、その概要を再録しておく(図1)。本品は全長7.07cm、頭部幅2.17cmを測る。頭部には2条

の沈線が刻まれており、いわゆる丁子頭の勾玉となっている。全体に丁寧な研磨が施されており、腹部、背部とも丸みを帯び、胴部断面はほぼ円形を示す。頭部には直径6mm程の孔が穿たれており、孔の直径は中心部に向かって小さくなっていることから両面から穿孔されたものと考えられる。この孔から延びる沈線はやや波打つように刻まれている。頸部には成形時の削り痕がわずかに認められる。石材はネフライト(軟玉)と考えられ、表面には気泡状の凹凸をわずかに認めることができる。色調は黒色から暗緑色を呈し、ほんの少し灰色がまだらに認められる。重量は、78.5gである。

この観察結果からこの勾玉は古墳時代の遺物ではなく、いわゆる琉球勾玉に属するものと判断した。琉球において勾玉が出土することは、世界遺産「琉球王国のグスク及び関連遺産群」の構成資産である「斎場御嶽(三庫理)」からも勾玉が出土しているように、琉球において祭祀に用いられる器物であることはこれまでも

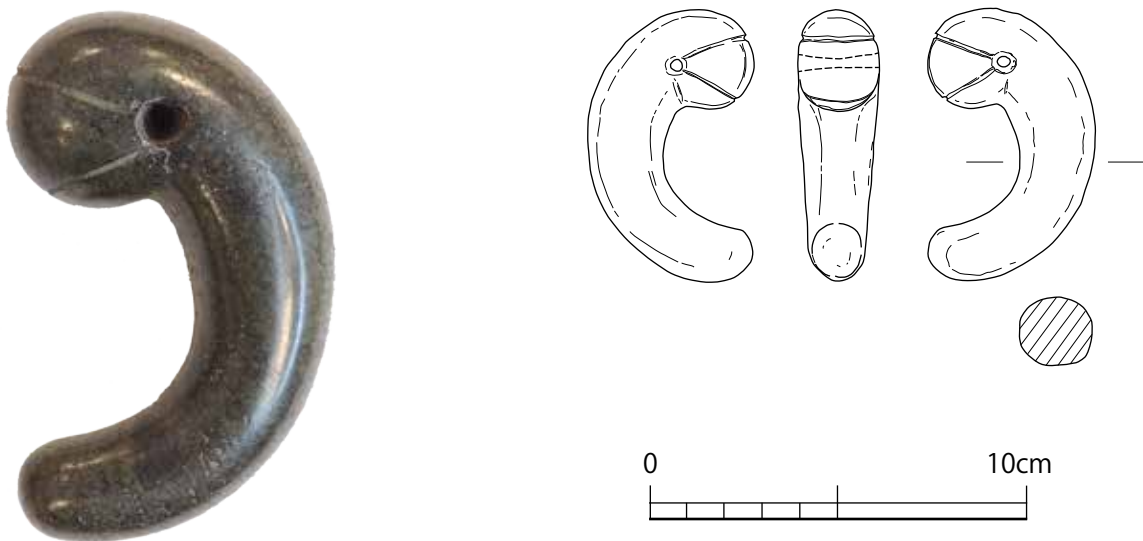


図1 杏雨書屋所蔵琉球勾玉

知られている。この琉球における勾玉の出自については、日本本土の古墳時代の勾玉との関連を見出すことは難しいものと考えているが、まだ明らかになっていないことも多い。

さて、この琉球から出土する勾玉のうち全長が7 cm を超える大きさであって、頭部が丁子頭となるように沈線が施されているものを「琉球勾玉」として考察していきたい。このような琉球勾玉については江戸時代においてすでに注目をされており、木内石亭による『曲玉問答』（1783（天明3）年刊）にも、琉球において「ノロクメ」と呼ばれる女性司祭が首に掛けて使用するものという正しい認識に基づいた記述がなされている。その後明治初頭の「琉球処分」という混乱期に多くの琉球勾玉が本土に持ち込まれたと考えられ、本学博物館が所蔵する神田孝平旧蔵の琉球勾玉もこの頃に将来したものであろう。

このように「小野蘭山愛蔵石類」に含まれていた勾玉はその大きさ、石材、施文方法のいずれの点からも典型的な琉球勾玉といえる。そしてこの琉球勾玉が小野蘭山の手元に存在していることは、18世紀後半に琉球から実物資料が本土にもたらされていたことを初めて確認できるという点に大きな意義があるものと考えている。

2. 『蘭山先生蔵畜品目』について

本節では、瓢野氏にご教示を得た『蘭山先生蔵畜品目』を紹介していく。本書は現在愛知県西尾市岩瀬文庫が所蔵している。上（20丁）・下（35丁）の2冊からなり、縦23.6cm・横16.4cm を測る小本である。岩瀬文庫の古典籍データベースによれば、小野蘭山の弟子にあたる水野皓山（1777～1846年）が書写したものであり、内題は「嵐山先醒蓄蔵産品」、書題簽は山本榕室筆と記されている。内容は蘭山が所蔵した植物、鉱物（自然石を含む）、魚介類の品名が列記されており、その下に簡単な解説（出土地や色彩などの特徴、用途）が付けられ、一部には図も添えられている。内容を概観すると鉱物や自然石あるいは植物とともに、僅かではあるが今日でいう考古資料の記述も認められる。例えば上巻八丁には「濃州各務野天狗飯土色砥ノ如シ」とあり、現在の岐阜県各務原市で出土したと想定される「石匙」の記述があ

る。他にも「曲珠」などの記述も散見されることから、蘭山がどこまで自然石と区別し、人工物（神代石）としての認識があったかについては不明だが、結果的に考古資料も所蔵していたことが分かる。

そのうち図が掲載されているものを1点紹介しておきたい。図2に示した通り、今日でいう子持勾玉である。図は横向きに描かれているが、江戸時代において子持勾玉は、「石剣頭」として認識されることが多かった。そのため腹側の勾玉部分が剣頭の柄（茎）と考えたために、横向きに描かれたものであろう。添えられた文章には「和州三輪産 冷滑石ニ作ルモノ薄青黒シ 神代頃 先人ノ佩玉」とある。用途については「石剣頭」ではなく「佩玉」としていること、さらに現在の奈良県桜井市三輪山麓にある大神神社の境内地からは多くの子持勾玉が出土しており、用途や出土地については正確に伝えられているものと考えられる。



図2 『蘭山先生蔵畜品目』掲載「子持勾玉」

このように本書の存在によって、蘭山の手元には植物だけでなく様々な鉱物や自然石、さらには考古資料が存在していたことは間違いのない。書写した人物が弟子の水野皓山であり、題簽も弟子筋にあたる山本榕室であることから記述の信ぴょう性も高く、それゆえ現在、杏雨書屋が所蔵している「小野蘭山愛蔵石類」が、こ

の『蘭山先生蔵畜品目』に掲載されている一部である可能性は十分に考えられる。

3. 『蘭山先生蔵畜品目』に描かれた琉球勾玉について

続いてこの『蘭山先生蔵畜品目』に描かれた琉球勾玉を見ていきたい。琉球勾玉は下巻六丁に図入りで掲載されている(図3)。添えられた文章には「琉球婦人ノ佩玉 青黒色ニシテ光り黒斑文アリ」とある。図は縦7.1cmほどに描かれており、琉球勾玉の大きさを示しているかのように原寸大と考えられるものとなっている。記述についても青黒色であり、まだらな文様の存在や光沢のある状況は、琉球勾玉の実物を前にして描いているものと考えられる。但し、頭部にある2本の沈線については触れられ



図3 『蘭山先生蔵畜品目』掲載「琉球勾玉」

ていない。

さて、ここに描かれた琉球勾玉と、「小野蘭山愛蔵石類」にある琉球勾玉を比較してみよう。大きさや胴部から尾部にかけての丸みや色調、さらにはまだらな文様の状況もよく似ているとあってよい。但し、頭部に穿たれた孔から延びる2本の沈線が作り出す角度は、両者で大きく異なっている。よってこの図に描かれたものが、杏雨書屋の所蔵する琉球勾玉であると断定することは難しい。但し、形状や色調がよく似ていることと、複数個の琉球勾玉が小野蘭山の手元にあったとも考え難く、同一のものである可能性も捨てきれないとしておきたい。

また添付されている文章には「婦人の佩玉」という記述があり、木内石亭の考察と通じるところがある。石亭は蘭山の弟子にあたることから師匠として弟子の記述を参照することが考えられるにしろ、この時期の本草家にとって琉球勾玉についての正確な用途が広く共有されていたものと考えられる。

4. 『蘭山先生蔵畜品目』に掲載された琉球勾玉の意義

今回『蘭山先生蔵畜品目』において、琉球勾玉が図入りで掲載されていることを紹介してきた。ここに描かれた琉球勾玉を「小野蘭山愛蔵石類」に含まれていたものと同一であるという判断は保留しておく。しかしながら蘭山の手元に確かに琉球勾玉が存在していたことは、実物資料とともに文献史料からも裏付けられたものと考えている。このことは「小野蘭山愛蔵石類」の来歴を考えていくうえでも重要なことである。

すなわち「小野蘭山愛蔵石類」については、箱蓋には和紙に押印された「衆芳軒蔵書記」の印影が添付されており、さらに蓋の裏面には直に蔵書印が押印してあることから、蘭山の手元にあったものとしてほぼ間違いないと判断している。しかしながら一度、その時期は不明であるが蘭山の手元から、あるいは彼の私塾である衆芳軒から流出したものであることも確かであり、この資料は昭和10年頃に杏雨書屋が購入したものである。よって流出から杏雨書屋に納められるまでの来歴については特段の記録もなく、厳密には伝世資料である。さらに現在は紙

縫りで杉板に留めた状態になっているが、一度は取り外されて保管されていた可能性を示す台紙も残されていたことから、この琉球勾玉が本当に蘭山の手元にあったか否かについては検討の余地が残されているとも考えていた。

然るに今回、彼の所蔵品を記した文献史料において琉球勾玉が掲載されていたことは、琉球勾玉が18世紀の後半には本土に将来していたことを確実にする根拠となる。そして確かに蘭山の手元には琉球勾玉が所蔵されていたことを、同一資料であるかは保留しておくものの、実物資料とあわせて実証できたものといえる。さらには資料だけでなく、その用途についても正確に伝えられていることが分かる。

杏雨書屋が所蔵するような7 cmを超える大きさがあり、頭部に沈線を施すことによって丁子頭とする琉球勾玉が生み出される背景については、未だ分からないことも多い。具体的には石材の入手先を含む製作場所や製作された時期、さらにはノロと称される司祭者のもとにどのような手順を経て琉球王朝からもたらされたのかという流通経路なども明らかになっていない。さらには他の水晶珠などと連結して佩用するようになった経緯も明らかになっていない。

この点については今後さらに調査を進めていきたいが、筆者は大形の琉球勾玉が生み出される背景には、18世紀後半における木内石亭や谷川士清らが本草学や国学の観点から勾玉を収集し、研究していたことが関与しているのではないかと考えたことがある²⁾。その根拠は状況証拠にとどまっているが、古墳時代以降において勾玉が注目される時期はこの18世紀後半からの数十年間の時期に限られており、この時期の研究成果が琉球へ伝わった可能性を考えたものである。今回、石亭や士清が活躍していた時期に、当該期における本草学の第一人者である蘭山の手元に琉球勾玉が到来していることが事実となった。そうであればこの時期に盛んであった勾玉研究の成果が、琉球勾玉が将来した道筋とは逆のルートで琉球へもたらされたことも十分に考えられることである。琉球の物産が一方的に本土に流入したのではなく、琉球へも薩摩藩を通じての交易や、あるいは琉球から直接本土へやってきた慶賀使、謝恩使の団を通じて様々な人やモノが行き交った中に、勾玉の情報

が存在していた可能性を指摘したい。

おわりに

琉球勾玉については、関西大学博物館所蔵品を見た時から「なんじゃこれは」という疑問の念が頭から離れない。古墳時代の勾玉に類似するにもかかわらず、古墳の出土品には存在しない大きさであり、石材も古墳時代の勾玉には使用されるものではない。それゆえ、どうしてこのような勾玉が時空間を異にする琉球に存在しているのかについて、いつか追及していきたいと思いつつながら時間だけが経過してきた。

今回、杏雨書屋が所蔵する琉球勾玉に触れたこと、そして『蘭山先生蔵畜品目』に掲載された琉球勾玉の記述を見たことから、再度琉球勾玉について考察を試みた。18世紀の後半に本草学、物産学などが盛んになり、学問だけでなく「好古」や珍しモノへの関心が、武士階級だけでなく市井の人々にも広がっていく。このような好奇心が学問の基礎にあり、考古学だけでなく、博物館学やあるいは植物学などにおいても、この時期の本草家らの研究成果が明治期以降にあって、様々な分野における学問の発展に寄与していると考えている。今後とも江戸時代から伝世している考古資料を通じて、彼ら本草家らの知的好奇心を追いかけていきたい。

註

- 1) 徳田誠志・山口卓也・山下大輔「武田科学振興財団 杏雨書屋所蔵の「小野蘭山愛蔵石類」『関西大学博物館紀要』第29号 関西大学博物館 2023年
- 2) 徳田誠志「関西大学博物館所蔵「琉球勾玉」について—大形丁字頭勾玉出現の一試考—」『関西大学博物館紀要』第21号 関西大学博物館 2015年

備考

図2・3の掲載にあたっては西尾市岩瀬文庫資料特別利用の許可を受けて掲載したものである。『蘭山先生蔵畜品目』の閲覧と、図の掲載にあたっては同文庫から多大なご高配を賜った。最後に記して感謝の意を表したい。

関西大学客員教授

浜降りの儀礼

黒田 一 充

個人や家族で海浜に降りていき、災厄を流すために禊ぎをする慣習があり、浜降り（浜下り）とよばれている。3月3日の雛祭りは、雛人形を飾る行事になっているが、もとは川などで身を清める行事であり、その名残として紙の人形を身代わりとして川や海に流す雛流しが行われている。

奄美・沖縄地方では、今も旧暦3月3日には、家族で浜や磯に弁当を持参して一日過ごすことになっている。この日は一年でもっとも干満の差が大きい大潮の日であり、干潮時に浜へ降りた女性たちが健康を祈願して、海水に手足を付けて身を清めるのだという。こうした女性のための行事日だったのが、潮干狩りの日に変わっている。

こうした年中行事としての浜降りは他の季節にもある。鹿児島県の徳之島では旧暦7月の盆の後に、祖霊祭と稲の収穫を感謝する行事として浜降りが行われる。

徳之島町井之川では、初日に一族で竹の骨組みだけの仮小屋を海浜に建て、内部に珊瑚をコの字に並べて竈を造る。2日目の夕方に、一重一瓶といって料理を詰めた重箱とお酒などを持ち寄ってヤドイで宴会をする（写真1）。その後、深夜になると太鼓に合わせて、輪になり男女が掛け合いで唄い踊る夏目踊りが始まる。集落内を3つの地区に分け、踊りのグループが各家を順番に廻り、翌日の朝まで踊り続ける。



写真1 井之川の浜降り（2011年）

亀徳では、3日目の行事としてネインケとよぶ水掛けが行われる。地区の中心部を通る県道に集まり、貯めておいた水を洗面器やホースでお互いに掛け合う。通りかかった自動車やオートバイなどにも水を掛けて、厄落としをする（写真2）。

宮崎県以北では、神社の祭りに先だって、神職や氏子の人たちが海浜へ行き、海に入って禊ぎをすることを浜降りとよんでいる。西都市の都萬神社では、7月の更衣祭の前日に、約15キロ離れた高鍋町堀之内の太平洋岸まで行って海水に入る。神職や氏子の人びと以外に、新盆を迎える遺族も禊ぎに参加する。

大阪でも、江戸時代には旧暦6月晦日の夏祭に住吉大社の神輿が堺へ渡御するのに先だち、14日に神輿洗いが行われたが、当日は社頭の住吉浜で海水に入り、禊ぎをした。住吉の潮湯とよばれて絵画にも描かれたが、昭和の初めまで海水に浸かっていた人びとの写真が残っている。

静岡県磐田市見付の矢奈比賣神社では、旧暦8月の天神祭の前に、神輿渡御で練り歩く鬼踊りの参加者たちが浜垢離をする。遠州灘に面した福田海岸に集まり、砂浜に大榭と鉾を立てて神事を行った後、順番に海中に駆け込んで肩まで海水に浸かる。写真のように、調査時は台風の影響による高波で大変危険なため、足を浸すだけに留めていた（写真3、4）。

浜降りには、氏子の人たちが禊ぎをする以外に、神輿が海浜に運ばれるところも多い。大阪



写真2 亀徳のネインケ（2009年）



写真3 見付天神祭の浜垢離 (2011年)

府阪南市の波太神社の秋祭では、3基の神輿が尾崎の海老野の浜に向かう。御旅所で神事があり、神輿を担いで海に運び込む(写真5)。

大阪湾で神輿が海に入るのはここだけだが、南へ行くと、紀伊水道をはさんだ和歌山県や徳島県で神輿の浜降りが見られる。

神輿ではなく、祭りの屋台を海水に浸けるところもある。愛知県の知多半島にある半田市亀崎町の神前神社で5月に行われる潮干祭では、高さ約6メートルの山車5基を砂浜へ曳き下ろす。曳き手たちは腰まで水に浸かりながら綱を曳き、波打ち際に山車を並べて順番にからくり人形を演じる(写真6)。

とくに浜降りが盛んに行われているのは東日本で、静岡県東部から神奈川・千葉・茨城・福島・宮城の各県の太平洋岸浜降りの行事が分布している。個別の祭りが市町村の無形民俗文化財に指定されているところも多く、千葉県の房総半島のように、「房総のお浜降り習俗」として一括で国の記録作成措置を講ずべき無形の民俗文化財に指定されているところもある。その中には、単独の神社で浜降りをするところもあれば、複数の神社の神輿が時間を合わせて同じ



写真4 見付天神祭の浜垢離 (2011年)

場所に集まるところもある。

神奈川県茅ヶ崎西浜海岸で7月に行われる浜降祭では、寒川神社を中心に、茅ヶ崎市と寒川町の各神社から30基以上の神輿が日の出の時間に合わせて集まって来る。

浜降りをする神社は海岸から近いところがほとんどだが、中には茨城県北部の常陸太田市の東金砂山と西金砂山の山上にそれぞれ祀られている東西の金砂神社のように、海岸から遠く離れた神社からの浜降りもある。両社では72年に一度、磯出大祭礼として、それぞれ500人をこえる行列を組んで日立市水木浜まで神輿が運ばれる。渡御の途中にある神社に泊まって神事や田楽舞の奉納を行いながら、7日間かけて約75キロの道のりを往復する。山から里、海をつないだ大規模な祭りである(写真7)。

水木浜は金砂の神が現れた場所であるという伝承があるように、浜降りは、祭神を現在の神社の地まで迎えて来た神話の再現をするのだと考えられている。ほかに、氏子の人たちの罪穢れや村の災厄などを神輿に集めて運び海に流すのだとするところ、あるいは海の彼方から新たに神を迎えて来て、弱体化していた霊力を再生するのだとするところなど様々な理由で解釈されている。

九州地方でも、神輿の浜降りが行われている。鹿児島県曾於市大隅町の岩川八幡神社では、11月の秋祭で弥五郎どん(大人弥五郎)とよばれる大人形が登場し、神輿の渡御行列の先頭を進む。高さ5メートル弱で、大小刀を腰にさし、鉾を持って四輪車に乗っている(写真8)。この神社は旧岩川城址の高台に社殿があり、大正3年(1914)に現在地へ遷されている。それまでは、東方を流れる前川と菱田川に



写真5 波太神社の浜降り (2013年)



写真6 亀崎の潮干祭 (2011年)

はさまれた場所にあったので、水害にあうことが多かったのだという。旧社地に社殿があったころの神輿渡御はふたつの川の合流地点へ向かい、それを浜下りとよんでいた。現在の浜下りは旧社地とは関係なく、神社周辺の市街地を練り歩いている。

現在、祭りに弥五郎どんが出るのは3か所で、宮崎県日南市飢肥の田ノ上八幡神社の弥五郎どんは、高さ約7メートルのため、電線の関係で立てられるだけになり、小型の弥五郎どんが浜下りに曳かれる。

もう一体の弥五郎どんは、宮崎県都城市山之内町の的野正八幡宮（円野神社）の11月の祭りに登場する。高さ約4メートルの弥五郎どんが3基の神輿を先導する（写真9）。この祭りを浜殿下りとよび、現在は神社から約600メートル離れた一の鳥居横にある御手洗池の池之尾神社まで行って放生会の神事を行うが、かつては北西へ約5キロ離れた同市高木町の春日神社まで行ったという。その場所は、花の木川の西側にあたる。

的野正八幡宮の地元では、浜下りと浜殿下りの違いはあまり意識されてはいなかったが、浜殿は神幸先の



写真7 磯出大祭礼・途中の金砂本宮での神輿 (2003年)



写真8 岩川八幡神社の弥五郎どん (2021年)



写真9 的野正八幡宮の弥五郎どん (2021年)

御旅所を指す呼称である。鹿児島県霧島市隼人町の鹿兒島神宮は、もとは大隅正八幡とよばれ、旧暦8月15日に放生会として浜殿下りが行われた。現在は、隼人浜下り神幸祭として10月になり、南へ約4キロ離れた真孝地区にある御旅所へ向かう。御旅所は浜殿とか八幡屋敷とよばれ、広い境内の奥に神輿を安置する石壇が設けられている。

御旅所から南側は錦江湾に向かって干拓地が広がり、奈良時代に火山活動でできたと伝えられる神造島3島や、その向こうに噴煙を上げる桜島まで見渡せた（写真10）。現在は高速道路の盛土が築かれ、家も建ち並んだため、写真のように海まで見通すことはできなくなっているが、浜殿が海浜に位置していることがわかる。このように、海浜や川岸の神幸地を浜殿（はまどの・はまどん）とよぶところが、九州各地で見られる。

大分県の国東半島の海岸部の集落や半島の沖にある姫島では、社殿から海側に神幸先の御旅所があり、半島の内陸部の神社では集落のそばを流れる川岸の近くに御旅所が設けられており、それらの御旅所を、とくに浜殿とよぶ神社が多い。

国東市国見町伊美の別宮社と豊後高田市香々地の別宮社では浜殿に建物があるが、ほとんどの神社では、国東市国見町の櫛来社（岩倉八幡社）の浜殿のように、盛土をした区画の奥に神輿を安置する石壇が設けているだけである（写

真11)。祭りの際には、神輿が運ばれて石壇の上に安置し、神事が行われる（写真12）。

浜殿の記述が史料に見える一番古い事例は福岡市東区の筥崎宮で、康平7年（1064）2月や康和4年（1102）7月に大風で浜殿の建物が転倒したという記述が、『百鍊抄』や『宮寺縁事抄』に見える。同区の香椎宮にも浜殿があったことが、12世紀の漢詩集『本朝無題詩』に収録された作品に記されている。

国東半島の南側の大分市浜の市には、柞原八幡宮（由原宮）の浜殿がある。現在は9月の仲秋祭（放生会）に神輿の神幸があるだけだが、正慶元年（1332）の「由原宮年中行事次第」には、5月5日の五月会、6月晦日の大祓、8月15日の放生会に浜殿へ行幸し、浜御殿で神事が行われたと記されている。

九州の西側でも、熊本県宇城市三角町の郡浦神社では、16世紀後半の天正年間まで、海浜にある浜殿神社へ神輿のお渡りがあったという。神社名は「はまどの」と発音するが、地元では「はまどん」とよんでいる、この浜殿は、『阿蘇家文書』の応永11年（1404）の検地帳に見える。

ほかに、長崎県の対馬には巖原町や豊玉町仁井に浜殿神社があり、峰町木坂は浜殿がある。壱岐島でも勝本浦の聖母香椎宮や筒城浜の白沙八幡宮などでも神幸先の神輿を置く石壇のある場所を浜殿とよんでいる。

浜殿の分布は、九州だけに限らず山口県にも見える。西岸の下関市豊北町では7年に一度の浜出祭で、田耕神社に合祀された巖島神社の神と土井ヶ浜の蛭子社の神が再会するのだと伝えられ、土井ヶ浜の浜殿に両社の神輿の神幸があり、神事や芸能が奉納される。

国東半島の対岸にあたる周南市や防府市にも



写真10 鹿児島神宮の浜殿（1988年）



写真11 櫛来社の浜殿（2023年）

浜殿があり、防府天満宮では祭神の菅原道真が上陸した地だとする伝説がある。さらに、瀬戸内海にある愛媛県今治市大三島の大山祇神社では、旧暦8月の産須奈大祭で、^{うてな}の御浜殿（三島神社）へ3基の神輿の神幸がある。

九州で浜降りが行われるのが八幡神社に多いのは、旧暦8月15日の放生会で貝や魚などの生き物を放つ儀式を海浜や川原で行うからである。これは、宇佐宮や同社の神宮寺であった弥勒寺の荘園が九州一円に分布し、八幡神が勧請された際に、古くから行われていた海浜での祭祀を基盤として放生会が拮がったと考えられる。

浜降りの神幸先を浜殿とよぶのは、浜御殿を省略してよんだところもあるが、多くは建物が無い場所であり、浜に敬称を付けて、特別な聖地であることを表しているようである。この浜殿が、ほぼ九州地方と山口県に限定して拮がっている理由はよくわからないが、呼称については、南九州では神霊が宿る樹木を中心とする森を森殿とよんでおり、関連があるのかもしれない。

本研究の一部は、JSPS 科研費 JP19K01214の助成を受けたものです。

関西大学文学部教授



写真12 姫島村・大帯姫神社の浜殿（2003年）

国府遺跡から出土した「刻痕有鹿角器」について

合 田 茂 伸

関西大学博物館のコア・コレクション「本山彦一蒐集資料（本山コレクション）」に標記「鹿角器」が含まれている。この資料は、『本山考古室列品目録』（以下、『本山目録』）に

*四二五 鹿角器 一個 河内國南河内郡道明寺村國府衣縫 長さ八寸五分 中央に刻線あり 大正八年四月十二日出土

と記載されている [末永 1935]。

また、関西大学博物館が刊行した本山コレクションの目録 [関西大学博物館 2010] には、

1. 石器時代遺物 / (分類) MY-S / (NO.) 0425 / (確認数) 1 / (確認資料名) 刻痕有鹿角器 / (本山資料番号) 第3棚 425 / (本山考古室遺物名) 鹿角器 / (個数) 1 / (本山要録地名) 河内國南河内郡道明寺村國府衣縫 / (現行政区) 大阪府藤井寺市 / (法量・備考) 長: 25.8 / 大正8年4月12日

と記録される。

このたび、この骨角器を熟覧する機会を得たので、その観察記録を記す。

この骨角器は「刻骨」と表記されることが多い遺物である。紙幅の都合上、学史上の位置付けや研究史は、末尾の主要参考文献を参照されたい。

松山友子氏は、鹿児島県歴史資料センター黎明館所蔵の「刻骨」表面を観察し、「両端に刻み目のない部分が残されており、刻み目が必ず凸湾部に施されていること、擦過痕が刻み目に平行についていることなどから、両端を持って使う擦る道具が考えられる」[松山 1989] と述べた。黎明館蔵資料は国府遺跡出土の本例と同型式に分類される「刻骨」である。松山氏の報告に導かれながら観察をおこなった。

『本山目録』には2面展開図が掲載されている。同図に3箇所の横断面図を加え、表面の状態を追記した(図1)。今回の計測では、全長は25.5cm、最小部の直径は2.0cm、重量は101gであった。また、『本山目録』実測図では認め

られない欠損箇所が刻目の部位にあることを確認した。写真は4面展開として撮影、掲載した(写真)。刻目を正面に置いた『本山目録』図の上段図をb面、下段図をc面として、通常の展開方法によりa面-d面として掲載した。『本山目録』実測図は製作及び現状に関する知見を表現するための図として作成されているとみられ、使用痕跡を図から読み取ることができない。写真撮影とともに、遺物の表面を微視的に観察し、同じくa面-d面の「表面観察図」を作成した(図2)。

角座及び第1枝は残存していない。第2枝は基部から切断されている。第3枝以降の先端は鋭利な刃物でえぐるように粗く削り取られている。左角と思われる。また、断面図(B-B')のように刻目周辺部は円形に近い断面形となっているが、両端部では鹿角の元の形状を一部残している。

器表面の多くをいわゆる「摩滅」が覆っているが、加工痕跡や使用痕跡が均一に分布しているわけではない。最も滑らかな面は中央付近の刻目周辺部で一種の光沢を放っている。一方、刻目の角(エッジ)は鋭く残存していて摩滅によるエッジの不明瞭化はみられない。a面、d面には粗面となった顆粒の粗い除去痕があり、それらは摩滅し側縁は不明瞭になっている。d面は比較的平坦な鹿角の原の表面をそのままとし粗面のまま全体を摩滅が覆っている。a面・左半・下側及びc面・刻目の右方には長軸方向の面取り加工が顕著である。

b面・c面の図右端には9条程度の刻目が残っているが中央部の刻目の状態とは異なり摩滅により刻みは浅くなりエッジは不明瞭である。

詳細については観察図を参照されたい。

本例の観察は、松山氏の観察に基づく、何かを擦る道具ではないか、という用途の推定に矛盾しない。刻目が全周せず3面に偏り、その周辺部は光沢を放つほど「きれいに摩耗している」[松山 1989] ことからみて、b面を対象物

に対する作用面、d面を背面とすることができる。周辺が摩耗しながら刻目のエッジが鮮鋭に残っていることから刻目と平行方向に対象物を「擦る」と考えることは、道具全体の凸側に刻目があることとも合理性があり、刻目の両側部を左右の手で握り、d面を背面として作業側に向けた状況を想像することができる。図右側に残る摩滅した刻目痕は、この鹿角製品が再利用品である可能性を示している。その場合、この刻目痕を中央部とすると、元の道具は現長の2倍ほどの長さとなる。

「刻骨」は長軸に直行して複数条の平行する刻目がある鹿角や骨製品の総称として用いられてきたため、使用法や用途の議論が分散してきた。個々の遺物の表面の観察をとおして、「刻骨」の中に埋もれている未知の道具の1種類を抽出することができるのではないかと考える。また、報告した国府遺跡出土の「刻痕有鹿角器」

を「刻骨」と呼ばなかった理由もそこにある。

主な参考文献

- (集成論文を中心に刊行年次順に掲げた)
 末永雅雄(編) 1935『本山考古室要録』(本山家蔵版) p.46
 木村幾多郎 1987「刻骨」『弥生文化の研究』第8巻(祭りと墓と装い) pp.55-65
 辻本和美 1987「出土遺物」『京都府遺跡調査報告書』第8冊 石本遺跡 pp.75-76
 松山友子 1989「館収蔵の刻骨について」『黎明館調査研究報告』第3集 鹿児島県歴史資料センター黎明館 pp.105-117
 木川正夫 1999「刻骨と鋸歯状木製品に関する比較考察—楽器説をめぐる諸問題について—」『年報』平成10年度 愛知県埋蔵文化財センター pp.160-181
 北浦弘人 2002「弥生時代の骨角器」『考古資料大観』第9巻(弥生・古墳時代 石器・石製品・骨角器) 小学館 pp.346-360
 関西大学博物館 2010『関西大学博物館蔵 本山彦一蒐集資料目録』p.49

関西大学博物館 学芸員

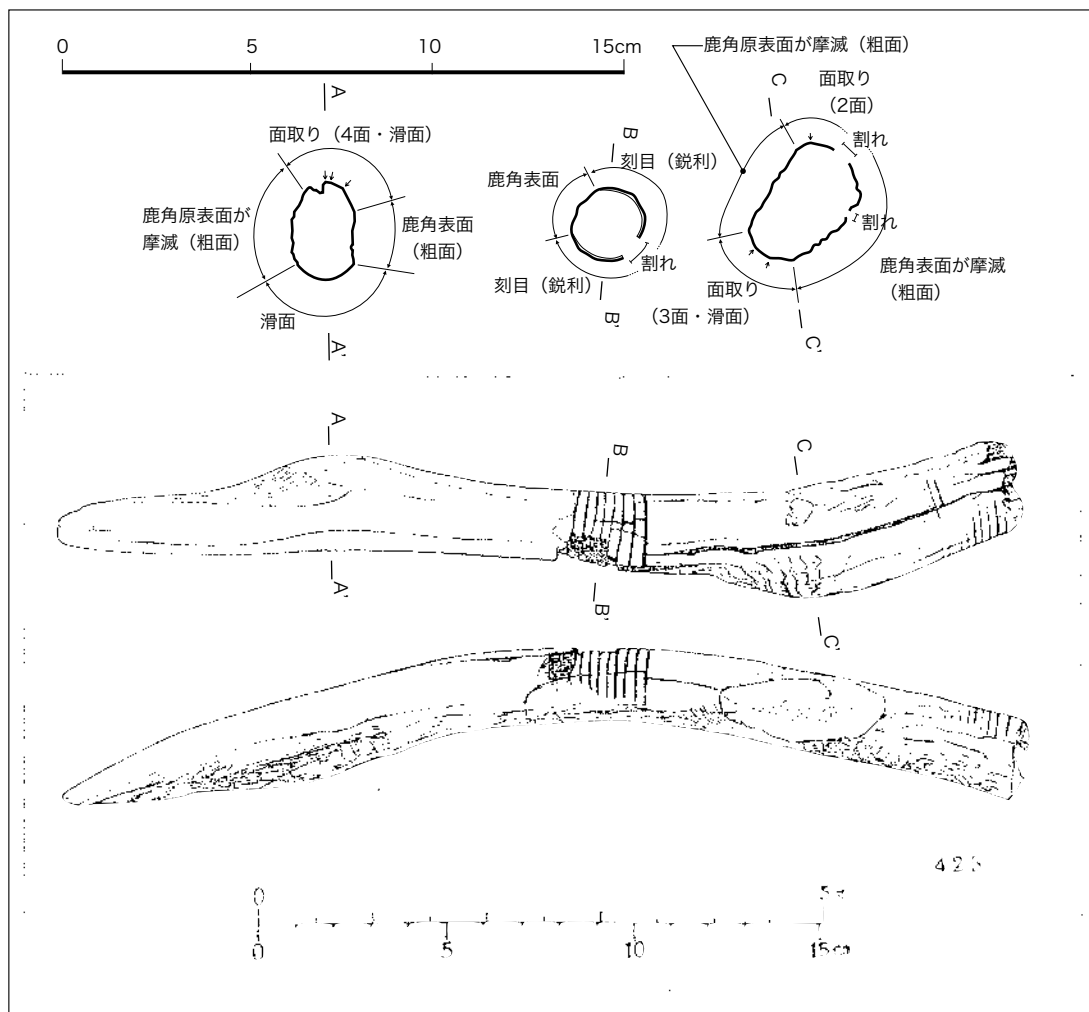


図1 国府遺跡出土刻痕有鹿角器実測図 ([末永1935] に加筆)



写真 国府遺跡出土刻痕有鹿角器展開写真

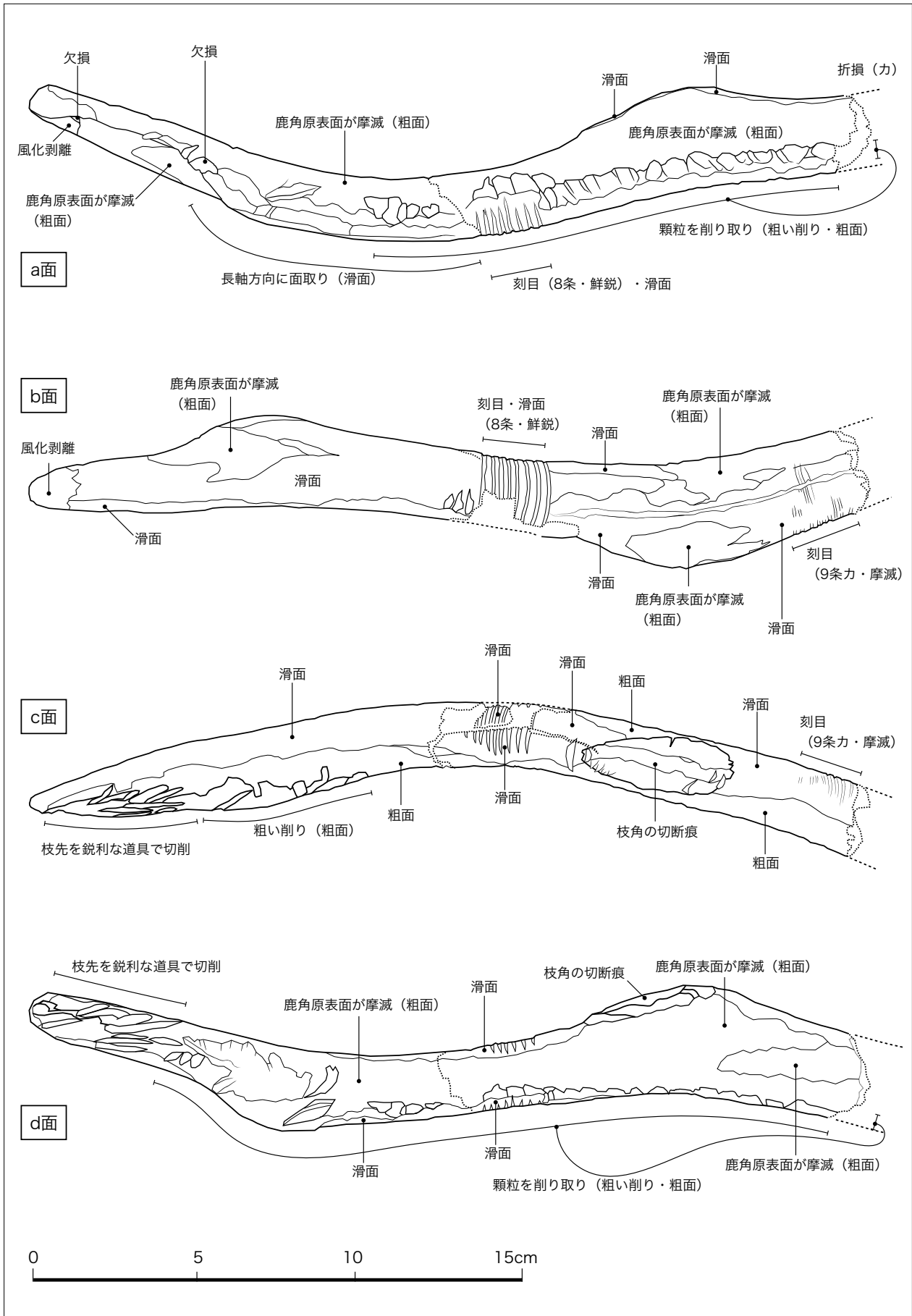


図2 国府遺跡出土刻痕有鹿角器の表面観察図

関西大学博物館 2023年度夏季企画展 「浪速の町絵師 菅楯彦が愛した大阪」開催報告

原 田 喜 子

令和5年(2023)6月11日(日)から7月22日(土)まで、関西大学博物館にて2023年度夏季企画展として「浪速の町絵師 菅楯彦が愛した大阪」を開催した。菅楯彦(1878-1963)は、軽妙洒脱で親しみやすく、洗練された独自の画風を確立し、近代の大阪で人気を博した絵師である。大正9年(1920)から、自らの印に「浪速御民^{なにわみたま}」の文字を使用し、昭和37年(1962)には大阪市名誉市民賞を受けた。楯彦が描いた大阪の風景や人々の姿は「浪速風俗画」と呼ばれ、現代人にとっては遠くなってしまった江戸末期から明治初期の大阪の雰囲気伝える貴重な視覚資料でもある。本展覧会では、個人コレクターが蒐集した300点を超えるコレクションの中から48点を厳選して展示した。

大阪における日本画について、美術史上で取り上げられる機会は、東京と京都の日本画に比べると極端に少ないのが現状である。関西大学では、かねてより、近世・近代の大坂(大阪)における日本画に注目し、「大坂(大阪)画壇」と称して作品の蒐集と研究に取り組んできた。そのなかで、近代を代表する絵師の一人として楯彦の名前を挙げている。

展示構成は第1章から第4章で展開した。第1章は、「暮らしとともに」と題して、大阪の四季の風物詩を描いた掛け軸を、正月から春夏秋冬の順に並べた。季節や行事、目的に応じて大阪の人々が暮らしの中に絵を取り入れていた様子を再現できればと考えた。第2章は、「歌と舞と酒」と題して、歌と舞と酒に関する掛け軸とともに酒器や舞扇などを展示し、書画会の雰囲気が出せるように工夫した。第3章は、「一品に華を添える」と題して、楯彦の絵によって彩られた道具を集めた。「一介の町絵師」を自称し、道具に絵付けをするという、楯彦の画業の幅広さを示した。また、道具を制作した作家との交流を示すことも狙いとした。第4章は、「楯彦の技」と題して、浪速風俗画だけでなく、歴史や伝説を描いた作品から、繊細な筆



ポスター (A2サイズ)

致や豪快な構図など、軽妙洒脱なだけではない楯彦の技を示すように心がけた。「静湖」という画号時代の歴史画《藤原惺窩先生講論語大阪城》や、伝説をもとにした作品である《蓬莱仙殿》、《清明の祈》などに続けて、世俗的な作品である《浪速風俗図十二ヶ月屏風 右隻》へと移り変わるように並べた。《春港良宵》では、楯彦を代表する技法である「片ぼかし」の作例を見せた。展示の補足として、楯彦の略歴とその背景にある大阪の文化と美術の歴史について記した全8ページのパンフレットを作成し、来館者に配布した。

関連イベントとして、講演会「菅楯彦の魅力と大阪の風土を語ります」を7月17日(月・祝)に以文館4階セミナールームで開催した。講師に関西大学の中谷伸生名誉教授を迎え、現

代のマンガ・アニメーションに先駆けた独自のスタイルなど、楯彦の魅力について語られた。参加者は103人であった。

広報では、学内の広報課への情報提供、全国の博物館への広報物の送付など従来の活動に加え、吹田市内の阪急電鉄沿線駅でのポスター掲示や新聞社への情報提供を行った。また、水都大阪コンソーシアムとの連携により、展示解説の動画と講演会の動画をYouTubeで配信することができた。今後、SNSの利用については慎重に判断する必要がある。

来館者数は合計で1,727人であった。中には、以前より楯彦ファンで自身もコレクターであるという人や、生前の楯彦と交流を持った人の子孫などがあつた。特筆すべきは、最近の大坂画壇の展覧会で楯彦作品を観てファンになったという人が近畿圏だけでなく、関東圏からも来館があつたことである。

現代では忘れられつつあると思われた菅楯彦であるが、作品や人を通じて現代にも生き続けていることが実感できた展覧会であつた。

関西大学博物館 学芸員



展示の様子（第1章部分）



展示の様子（第2章部分）



展示の様子（第3章部分）



展示の様子（第4章部分）

◆ 博物館だより

◇2022年度関西大学博物館 開館日数・入館者数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
開館日数	26	24	28	26	18	25	27	24	22	19	16	18	273
入館者数	1,352	2,935	994	306	908	711	754	727	267	255	320	459	9,988

◇関西大学博物館春季企画展「摂津加茂遺跡発掘70年展」を開催

2023年4月1日から5月21日にかけて開催し、会期中には2,330名にご来場いただきました。鳥取県との共催による「とっとり弥生の王国青谷上寺遺跡から青谷弥生人がやってきた」と題した展示を同時開催しました。春季企画展に関連したミュージアム講座では、濱田竜彦氏（鳥取県とっとり弥生の王国推進課）をお招きして、「遺跡を魅せる—弥生時代遺跡の魅せ方・楽しみ方—」をご講演いただき、100名にご参加いただきました。



◇今年度も資料の取扱いを実践的に学ぶ「博物館実習実践研修会」を開催しました。小畑弘己氏（熊本大学大学院人文社会科学部・教授）による土器圧痕研修（6月3日）、河内國平氏・河内晋平氏・高見國一氏による日本刀研修（6月24日）を実施し、2回の講座で合わせて49名にご参加いただきました。

◇2023年度夏季企画展「浪速の町絵師 菅橋彦が愛した大阪」を開催

2023年6月11日から7月22日にかけて開催し、会期中には1,727名にご来場いただきました。7月17日に関連イベントの講演会「菅橋彦の魅力と大阪の風土を語ります」（講師 本学名誉教授 中谷伸生氏）を開催し、103名にご参加いただきました。

◇夏の恒例行事「キッズミュージアム」は、少数での講座形式として8月2日・3日に実施しました。「拓本をとろう」「埴輪をつくろう」「縄文タイルをつくろう」「化石に触れてみよう」の4つの講座を行い、抽選で選ばれた約100名の小学生が参加しました。



◇この度、本学校友の角谷與齊氏から鉄雲龍釜^{てつうんりゅうがま}、唐銅雲龍風炉^{からかねうんりゅうふうろ}の2点をご寄贈いただきました。本学名誉教授の小幡齊氏からは、古生物化石資料168件191点、関連書籍14冊をご寄贈いただきました。今夏のキッズミュージアムでは、小幡先生の解説のもと、アンモナイトや三葉虫の化石を実際に触らせてもらった子供たちは、地球の成り立ちに思いをはせました。また、本学校友西澤義勝氏から、皇陵巡拝活動の一環として流行した「陵印」を捺印した集印軸1点をご寄贈いただきました。今後博物館で充分活用していきたいと考えています。

．．． 編集後記 ．．．

表紙の加茂遺跡出土弥生土器（台付長頸壺形土器 当館蔵）〔高さ21.3cm〕は、1952年に関西大学・関西学院大学が実施した共同発掘調査で方形周溝遺構から見つかりました。

細長く伸びた頸部、算盤玉形の胴部を有する優美な器形を櫛描文や突帯などの文様が飾ります。写真中央に映る、4つ連続した円形浮文を施すのは極めて稀な例といえます。これらの特徴から、弥生時代中期後半に摂津地域でつくられた土器であることが分かります。焼成後に底部が穿孔されていることから、儀礼や葬送で用いられたと考えられます。

